

台湾人向け「東京高円寺阿波おどり」体験会 J-TLACと連携

東京新聞は東京都杉並区と2012年から6年間、実行委員会形式で共に観光事業振興に取り組んでいる。杉並区は住宅街として発展しており、取り立てて目立った観光資源と呼べる施設はない。しかしソフトとしては毎年8月に開催される「東京高円寺阿波おどり」で二日間に100万人以上が訪れる大イベントを持つ。

「東京高円寺阿波おどり」が立ち上がった経緯は非常にユニークだ。隣町の阿佐ヶ谷が仙台や平塚を意識した「七夕祭り」の開催を始めたのに対抗して、商店街の青年部が「阿佐ヶ谷に負けてはいけない！！」と立ち上がった。しかし、祭りの神輿を作るのはお金がかかり、盆踊りをするにはやぐらを組むスペースもないという悩みを抱える中、「徳島に踊りながら道を歩く阿波おどりがあらしい」というメンバーの一言で始まった。当初は、正式名称に阿波おどりと名乗るのが憚れ「高円寺ばか踊り」という名で動き始めた。その後、徳島新聞社を通じて徳島県人会で結成された「木場連」と巡り合い、「ばか踊り」から「高円寺阿波おどり」へと変化したという歴史がある。

東京新聞では今年度初めから、東京高円寺阿波おどり振興協会と共にJ-TLACの枠組みで事業を杉並区から受託した。杉並区との文化交流もあり、2年に1度現地でも「阿波おどり」を披露するという親和性の高い台湾をターゲットにした取り組みだ。台湾国内での情報発信事業と台湾人向けの阿波おどりの体験会を杉並区内で実施した。体験会参加者のアンケート結果は非常に満足度が高く、自治体、振興協会としては今後の手応えを感じている。

東京高円寺阿波おどり振興協会事務局長の富澤さんは「阿波おどりは商店街の活性化のために始まった。阿波おどりを通じて外国人観光客が増えるなか、各商店も変わらないといけない」と商店街の国際化対応を検討。既に電子マネーの導入など今後の展開の相談が入っている。これからも東京新聞はJ-TLACと連携し地元新聞社として地域の発展に尽力していく。

中日新聞東京本社(東京新聞) 地域活性化チーム 甲地正幸



左：鳴り物体験の様子



中央：体験会後の記念写真



右：第2回(昭和33年)の様子